

第2章 読谷村と沖縄戦

1. はじめに

沖縄には無数の遺骨が収骨されず、不発弾も埋もれていて、今なお戦争の悪夢の影を引きづっている島である。

沖縄戦は、国内で唯一住民を巻き込んだ地上戦闘であった。“鉄の暴風”といわれる激しい戦闘が3ヶ月以上も続いた結果、県民4人に1人が犠牲になり地上は山の形も変わるほど破壊され尽くされた。人の命もさることながら古来から綿々と引き続かれた文化遺産もほとんど灰じんに帰してしまった。

この激しい闘い（米軍の本島上陸地域）が始まったのが読谷村から北谷町の西海岸であった。

本項では、上陸地域となった読谷村内の戦闘の様子を元米兵の手記より詳しく知ることができます。又、戦禍をくぐり抜け、今、確かに生きている我々が再び後従するような過ちを犯してはならないという思いを噛み締めつつ上陸直後に起こったガマの出来事もまとめました。

2. 読谷山村（読谷村）へ米軍上陸

(1) 沖縄戦の状況

沖縄守備軍（第32軍）の任務は、南西諸島を本土として守り抜くことではなく、出血消耗によって米軍を沖縄に釘付けにし、国体護持・本土決戦準備のための「捨て石」となることであった。

第32軍の総兵力は約10万人で、全島要塞化のために農耕地を接収し、老幼婦女子にいたるまで根こそぎ動員した。伊江島・読谷山（北飛行場）嘉手納（中飛行場）浦添（南飛行場）・首里・西原・那覇・糸満・南大東島などの飛行場の他、宮古島・石垣島でも航空基地の建設が強行された。

政府は閣議決定にもとづいて、南西諸島から約10万人の老幼婦女子と学童を南九州と台湾へ疎開させた。多くの疎開が潜水艦の攻撃を受けて沈められた。沖縄本島では、中南部の老幼婦女子が北部の山岳地帯へ疎開させられた。

1945年3月、グアム島を発進した沖縄攻略部隊は艦船約1千五百隻、上陸部隊7個師団18万3千人、後方の支援部隊を加えると54万8千人（当時の沖縄の人口が約45万人）に達した。米軍の最初の攻撃目標は、慶良間諸島であった。3月26日、阿嘉島・慶留間島・座間味島に上陸、27日には渡嘉敷島に上陸、29日には慶良間諸島の全域を支配した。

この戦闘の間に、慶留間・座間味・渡嘉敷では、日本軍の強制によって凄惨な「集団死」事件が起こっている。

米軍は、沖縄本島上陸前の1週間で4万発の砲弾を撃ち込み、1千六百機の艦載機で爆撃・銃撃を加えた。4月1日、米軍は沖縄本島中部西海岸の読谷山・北谷に上陸、北飛行場と中飛行場を占領し、4月5日頃までには宜野湾村宜野湾以北の中部一帯を制圧した。（米軍は沖縄攻略作戦をアイスバーグ作戦と称した。）

上陸した米軍の主力は、4月7日頃から首里の日本軍主陣地をめざして総攻撃を開始した。首里北方の浦添村前田、宜野湾村嘉数の高地を中心に、一進一退の攻防戦が40日間も続き、この戦闘で、日本軍は主戦力の8割を失った。5月下旬、首里は米軍に占領された。牛島司令官は首里を逃れて、島の南端の摩文仁へ撤退した。

6月中旬頃には、3万人の日本軍と10万人の住民が、南部に追いつめられていた。日本軍は住民の避難壕を奪い、あるいは軍民雑居の壕では泣き叫ぶ乳幼児を殺した。米軍は、洞窟に隠れている住民と日本軍に投降を呼びかけた。しかし日本軍は、投降勧告に従って出ていこうとする者を射殺した。米兵は、陸上からは砲兵部隊と戦車部隊によって海から

は艦砲射撃によって、集中砲火をあびせた。1平方メートルに1発の割合で砲弾が降ってきた。火焰戦車と手りゅう弾によって、洞窟をひとつひとつ攻撃してつぶし、軍民を無差別に殺していった。牛島司令官らは6月22日、摩文仁の洞窟で自決し、第32軍の組織的な戦闘は終わったが、牛島司令官は、「最後の兵まで」尚戦闘を続けるように命令していた。

(2) 読谷山村（読谷村）での闘い

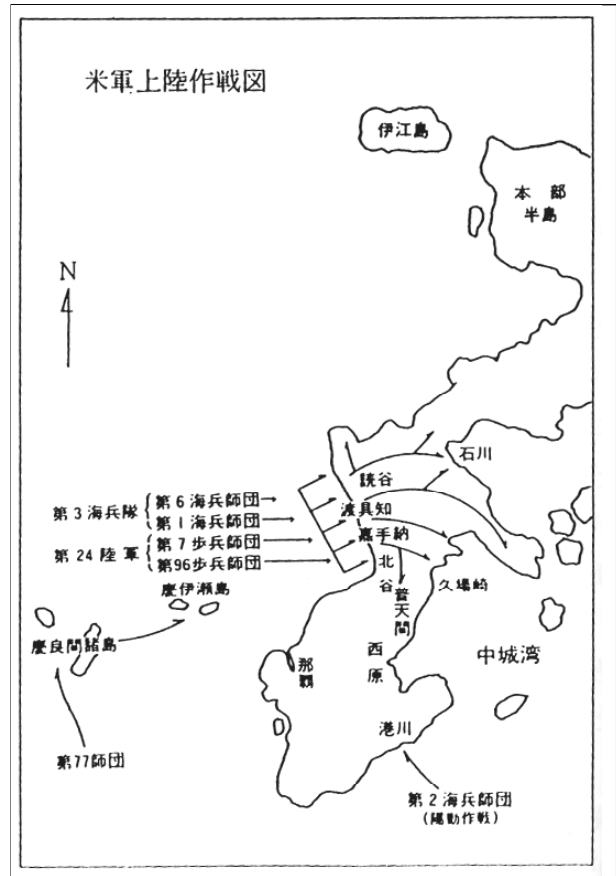
沖縄攻略作戦（アイスバーグ作戦）に登用された連合軍の兵員の総数は約45万人で上陸地点付近海域には、1千3百隻分の大艦隊が押し寄せて、空からは数千の攻撃機が容赦なく猛攻撃を繰り返した。総攻撃の時間は1945年4月1日午前8時30分とされた、午前4時30分、第51機動部隊司令官ターナー海軍中將は「上陸開始」の信号を発した。5時30分、夜がまさに明ける20分前、戦艦10隻、巡洋艦9隻、駆逐艦23隻そして177隻の艦砲がいっせいに砲口を開き、総攻撃直前の掩護射撃が開始された。

以下に、沖縄戦の戦禍をくぐり抜けたアメリカ軍兵士の手記『アメリカの一水平の沖縄戦日記』（名護市史叢書・6）から読谷上陸前後の記述を抜粋し、紹介する。

1945年3月30日（金）

総員配置。戦闘具をひつつかみ、船上の砲座に駆け上った。今朝の天気はまだ悪かったが、我々は上陸の準備をしなければならなかった。

船長が、「諸君、今にことが始まるぞ」と言った。すぐに、水・燃料を補給し、弾薬の入った20ミリ機関砲を積み込む。マリン兵達も作業中だ。自分達の物資を積み込むのにハチのような忙しさだ。やがて、この人間の作り出す地獄が始まろうとしているのだ。



1945年3月31日（土）

総員配置、砲座に着く。海の奴も今朝は静かになった。天気はそう悪くない。頭上を戦闘機が旋回している。ヘルキャットとコルセア機だ。それらのうちの何機かはずっと日没時まで飛び続けている。

午後6時、いつもの太陽が西に沈みかけたその時、艦内マイクが「よく聞け、よく聞け、島だ！」と言っているのか聞こえた。敵の島沖縄は艦首の方向だ。これは本物なのだ。司令官はすべての兵士が自分の義務を果たすように求めている。（後略）

1945年4月1日（日）

（前 略）

午前4時35分、我々は上陸地点（レッド3）の沖合1,200ヤード（1,100m）で作戦を展開していた。それはシー川（比謝川？）の河口になっているところだ。とにかく我々の地図には川と記されているが、どこでも歩いて渡ることができた。読谷飛行場は東へ800ヤ

ド（730m）行った台地がある。第111陸戦部隊と第1・第6海浜師団（指揮官：ガイガー将軍）が同飛行場の制圧に当たっている。

午前5時55分、夜明けが訪れた。また人間がつくった地獄が始まった。目にするすべての戦艦・巡洋艦、それに駆逐艦が上陸地点に砲撃を開始した。この砲撃の中で、生き物がどうやって生きのびられるのか、私には分からない。

（中 略）

午前6時30分、中島B5nl（ケイト）が戦艦テネシー号に突っ込んできたが、船首の左側に突っ込んだ。

午前6時55分、もう一機が突っ込もうとした。川崎「飛燕」（トニー）だ。しかし失敗した。弾が命中し、空中分解したのだ。

（中 略）

ここで我々は上陸地点に向かった。これらはすべて30分の出来事だ。

海岸から読谷飛行場へは約800ヤード（730m）の坂道だ。道中、マリン兵達が坂を先に登っていくのが見えた。一発の銃声もなかったと思うが、ただ怪我をした馬を一頭見た。どうして誰か馬を射殺して痛みを取り去ってやらないのか、よく分からなかった。

午前8時35分、我々は上陸地点の海岸に陣取り、昇降口を降ろし、荷を降ろし始めた。マリン兵の第一陣はすでに読谷飛行場に着いていたに違いない。ライフルや自動小銃の発射音が聞こえる。

（後 略）

1945年4月4日

（前 略）

今度は、LSTの近くに到着した。そこでは、兵士達が負傷兵を運び入っていた。ある者は脚をずたずたに吹き飛ばされ、ある者は腕や手を失い、またある者は大変な火傷をしていた。私は悲しく寒々とした気持ちになった。私は神に対する信念を失いかけていた。なんとしたことだ。もしこの世の神がいるな

ら、どうして人間にこのようなことをさせるのか、よく分からない。人間は文明を持っているはずだ。人間てどういう生き物だろうかと思ひ始めた。

（3）「生死を分けた二つのガマ」

～チビチリガマ・シムクガマ～

米軍の沖縄戦への上陸の地となった読谷村でも昭和20年4月2日（米軍上陸翌日）波平のチビチリガマに避難していた波平区の住民140人中83人が「集団自決」をするという悲惨な出来事がありました。そのほとんどが老人・女性・子供達でした。それは、身内同志が殺し合う地獄絵図のような惨状が展開されました。

対象的に約1.5km離れた場所にシムクガマがあり、奥行き2kmを越える大きなガマで約1,000人が避難していた。米軍が上陸してガマの上で投降を呼びかけたのを聞き、ハワイ帰りの男性2人が米兵と交渉した結果、米軍上陸直後の戦車の砲弾で死んだ3人を除き全ての人々が無事に捕虜となって生き残った。

このように明暗を分けた出来事が村内でも戦争によって発生したのである。

自決された人々を悼むと同時に集団自決を正面から取り上げ永遠の平和を願い、戦争の恐ろしさ悲惨さ生命の大切さを次世代に伝えていくのが今に生きる私達の使命でもあります。

詳しい詳細については、チビチリガマ遺族会が発刊している「チビチリガマ世代を結ぶ平和の象」再建完了パンフレットをご利用下さい。

(4) 写真で見る沖縄戦（読谷村）
〈米軍上陸の様子〉



上空から見た米軍の沖縄上陸作戦の様子。居並ぶ米軍艦船、上陸用舟艇が見える。左側にある河口が比謝川で、右側が嘉手納町水釜海岸である（4月4日）



嘉手納沖の輸送船団から揚陸された戦車隊。



読谷海岸のリーフ内を進軍する海浜隊員。比謝砦に中村1個中隊を残し、主力部隊はすでに南下しており、無血上陸となった。（4月1日）



攻撃第1波が上陸指定海岸に着いたのが午前8時30分、その後どの隊も遅れず上陸した。水陸両用戦車で読谷海岸に上陸した海浜第22連隊。



爆撃を受けた渡具知部落及び比謝川河口の様子。部落の家々を初め、嘉手納製糖工場へ通じるトロツコ用回転橋が破壊されているのが見える。上陸地周辺に撃ち込まれた砲弾の数は44,825発を数え、ロケット弾33,000発、白砲弾22,500発も同時に撃ち込まれ、激しい集中砲撃であった。



渡具知海岸に補給物資・資材を降ろす作業兵士。

〈占領下の読谷〉



上陸地周辺部落は明らかに廃墟と化し、ひとり子一人いない。米兵はこの不思議な静寂し牧歌的な風景にしばらく心を奪われたと言う。上陸初日、無人の楚辺部落。



上陸後、日本兵及び住民を求めて部落内を散策する米兵。どこの部落か不明。(4月1日)



渡慶次国民学校と思われる。吹き飛ばされたが校舎は残った。



家々はほとんど吹き飛ばされ、屋敷囲いだけが残った波平部落。上陸以前から、住民の多くはチビチリガマやシムクガマに避難していた。

読谷から石川へ進軍する第六海浜師団屋敷囲いの中に野営テントが見えるが読
 谷地内が、場所は不明（四月二日）



渡具知部落の日本軍の炊事場だった大湾哲雄（屋号名城）さん宅
 （四月十四日）



通信隊の基地になった民家。場所不明。現在読谷村にはトリイ通信施設・楚辺通信所（象のオリ）・F B I S 瀬名波通信施設があるがそのはしりか。



上陸後、前線の後方になった読谷村では電話線架設が開始された。作業にあたる万能改造車。（場所不明）



古堅の部落を通過する米海兵隊戦車。(4月)



大湾部落か。場所不明。



読谷村で戦前最も栄えた比謝砦。中央の水陸両用戦車の向こうに、戦災をまぬがれた二階建て瓦葺き住宅が比嘉憲四郎宅（屋号ヒジャ）である。（4月4日）



比謝砦部落からウフグシク脇を長田川沿いに北に進軍する米兵。比嘉憲四郎宅左側後方にメーグシクの松林が見える。（4月5日）



比謝橋に設けられた米海軍設営隊キャンプ。嘉手納（現名嘉病院高台）から望む。（4月8日）



前線部隊と交替するために、比謝橋を通過する米兵。（4月8日）



ここ比謝橋では、比謝橋破壊の任務をおった中村1個中隊と米軍との間で、読谷村で唯一戦闘らしい戦闘が行なわれた。以後、旧来の石橋は修復され、さらに4月には屋良より鉄橋を架設し、前線への物資補給に供した。(6月)